

彙報

平成十二年度春期東洋学講座講演要旨

(近年の敦煌学の世界)

——敦煌文書発見一〇〇年に寄せて——

第四五五回 五月九日(火)

敦煌写経の歴史

東洋文庫研究員
京都大学名誉教授

竺 沙 雅 章

敦煌発見の文献の八、九割は仏典の写本である。そのうち、大藏経に収められていない古逸・疑似經典などは早くから注目されてきたが、それらは全体からみれば極くわずかなものである。大部分は『大般若経』、『金剛経』、『法華経』などの今もよく用いられている習見の仏典であり、別段めずらしいものでもないので、『法華経』、『般若心経』等を除いて、本格的に研究されることはなかった。ただわれわれは、もう四〇年以上も前のことになるが、故藤枝晃

先生の指導の下に敦煌写経の調査を行った。ここでは、その時の状況を振り返り、その後を得た知見を加えて、敦煌写経の歴史をたどってみようと思う。

一九五二年、故榎一雄博士の努力によって、スタイン収集敦煌文献のマイクロフィルムが将来されると、その焼付写真が東洋文庫と京都大学人文科学研究所に置かれて、双方で研究することになった。人文研では、藤枝先生主宰の研究班が組織され、主に仏典の整理を担当した。班員はそれぞれいくつかの仏典を受持つて、その経文が『大正藏』のどの箇所にあたるかを調べ、写本の形状、書写年代、奥書などをカードに書き込み、それが終ると、經典ごとにとめて「解題」を作つて、それを全員で検討し添削した。藤枝先生が示した研究方針は、「スタイン本を、全体として——乃至敦煌本全体として、そこに如何なる經典が、どれほど、どの様にして存するか、ということを目にした」ものであり、その通りに実行された。他の収集本も見られる現在では補足すべき点は少なくないが、これによって、われわれは四世紀から一〇世紀末に及ぶ敦煌写経のおおよその傾向をつかむことができた。なお、私は般若經典を分担し、現在までその時の経験が自分の研究に生きている。

数万年にのほる敦煌写経は、書写年代によって、北朝期、隋唐期、吐蕃期、帰義軍期に大別される。それぞれの時期

の写経の特色を概述しよう。

北朝期 紀年を有する最古の写経は、四〇六年書写の『十誦比丘戒本』であるが、四世紀末で溯るものもいくらか存する。初期の写経は一行一六字から一八、九字と一定しないが、五世紀中ごろに一行一七字の標準形式が生まれ、一切経として大量に書写されるようになった。敦煌での大規模な写経事業として、六世紀初の敦煌鎮写経、ややのちの東陽王元榮の願経が挙げられる。書体は隸書体から楷書体へと移る時期に当たり、その変化が年代判定の有力な規準となる。わずかながら南朝写経もあり、それによって南北の書風の違いが知られる。

隋唐期 楷書体が完成する時期であるが、隋代ではまだ北朝風が残っている。隋代の写経には、開皇九年皇后敬造の一切経のはなれ、李思賢、王海などの供養経が目される。唐代に書写されたものが最も多く、それには「長安宮廷写経」など中央から来たものも含まれる。八世紀には草書体の章疏類が長安から伝来しており、やがてそれが敦煌の仏教学興隆をもたらすことになった。

吐蕃期 古代チベット王国の吐蕃が支配した七〇余年間は、敦煌の社会に大きな変動をもたらしたが、仏教の活動は支配者が積極的に利用したことによって盛んになり、蕃漢相互の訳経、官宮の写経事業が行われ、『大般若経』『金

光明経』『無量寿宗要経』などが大量に書写された。この時期には中国から紙筆が入らなくなり、経典も厚手の紙に木筆で書写された。それは次の帰義軍期でも同様であった。

帰義軍期 吐蕃に代わって漢人の張氏、ついで曹氏が支配した時期であつて、中国王朝の正朔を奉じていても事实上は独立の王国であつた。張氏、曹氏ともに仏教を崇拜したので、仏教は引きつづき栄え、写経の種類も多様になつた。経典の変化で注目されるのは羅什訳『金剛経』であつて、分科を施し冥司偈を加えたものが流通した。形態上でも、卷子本のほかに冊子本があらわれ、日用受持経典が書写された。さらに木版本の出現、絵入りの『観音経』『十王経』『仏名経』などもこの時期のものである。このような民衆経典を通して、当時の人々の仏教信仰の様子がうかがわれる。

中国には伝世の写経は極く稀であつて、敦煌写経によつてはじめてその形態や変遷が明らかになつた。また写経には当時の社会、文化の諸相が色濃く反映されているものであり、歴史史料としても重要である。今後、敦煌写経がさまざまな角度から大いに研究され活用されることを望みたい。